

古アイスランド語『詩のエッダ』の小辞 of について

野添 聡

金城学院大学非常勤講師

nozoe.satoru.84a@kyoto-u.jp

要旨：本稿の目的は、古アイスランド語における小辞 of の機能を再検討することである。最古期のゲルマン語では、接頭辞 ge- が完了相の指標として機能していた。接頭辞 ge- の機能が衰退した結果、後代の言語では、助動詞を用いる現在完了形が発達した。他方、文献時代以前に接頭辞 ge- が衰退したアイスランド語では、小辞 of が完了を表したと考えられている。しかしながら、従来の研究では、小辞 of の機能について研究者の間で意見が対立しており、小辞 of の機能については再検討の余地がある。

本稿では、古アイスランド語文献『詩のエッダ』の実例に基づいて小辞 of の機能を分析し、小辞 of が、助動詞を用いる現在完了形ほど明確な完了表現の形式ではなかったことを指摘する。

キーワード：古アイスランド語、『詩のエッダ』、小辞 of

1. 序

本稿の目的は、古アイスランド語における小辞¹ of の実例を分析することで、この小辞が持つとされる完了相を表す機能を検証することである。

古期のゲルマン語に関する研究では、「完了」について多くの研究者が論究しており、完了相を表す代表的な形式として、接頭辞 ge- が挙げられる²。接頭辞 ge- に関する研究である吉田 (1980) では、元来、完了相を表す機能を持っていた

¹ 後述するように、古アイスランド語の of は前置詞、接頭辞としても用いられる。Gering (1971: 753) のように of の用法を「副詞」とする研究者もいるが、一般には „Partikel“ と呼ばれることが多い。本稿では、後者を取って「小辞」と呼ぶ。

² 代表的な研究として、Streitberg (1891) 参照。なお、一つの試みとして野添 (2020, 2021, 2022)。

ゲルマン語の接頭辞 *ge-* が、次第にその機能を失い、後代の個別言語において分析的な現在完了形に取って代わられたと論じられている³。

接頭辞 *ge-* は古今のゲルマン語において多くの方言に在証されることから、従来の研究ではゴート語だけではなく、古英語や古高ドイツ語などの文献を対象に議論が重ねられてきた⁴。しかし、多くの研究者が考察を試みている東ゲルマン語・西ゲルマン語とは対照的に、北ゲルマン語（北欧語）における接頭辞 *ge-* に関する考究は少ない。その一因として、現存する北ゲルマン語の文献において接頭辞 *ge-* がわずかな痕跡を除いてほとんど失われていることが挙げられる。ゴート語などの古期のゲルマン語において完了相を表した接頭辞 *ge-* が失われたからこそ、北欧語では、完了を表す形式として現在完了形が発達した⁵。

他方、古アイスランド語では、次節で述べるように小辞 *of* が接頭辞 *ge-* に類似する機能を持っていたとも考えられている⁶。従来の研究では、小辞 *of* が持つとされる完了を表す機能について、しばしば言及されている。しかし、古アイスランド語の小辞 *of* の機能に関する文法記述や研究書には、様々な見解が示されており、この小辞の機能に関して研究者の見解はこれまで一致していない。事実、小辞 *of* の持つとされる完了を表す機能については、否定的な見解も見られ、この小辞が何の意味も持たない韻律上の埋め草であるとする記述も見られるほどである⁷。実際、古アイスランド語の文献『詩のエッダ』の語彙集である Neckel (1936²: 133) では、小辞 *of* が接頭辞 *ge-* (*ga-*) と同様の完了的な意味を持っていたと記述されている。しかし、その改訂版である Neckel/Kuhn (1968³: 156) では、当該の記述は削除され、小辞 *of* が意味を持たない韻律の虚辞であると記されている。

このように、小辞 *of* はその機能を解明することが困難であればこそ、Kuhn (1929) や Dal (1930a, 1930b) のような、より専門的な考究も試みられてきた。しかし、本稿でとりわけ問題となる完了を表す機能に関しては、後述するように上述の研究の間でも主張が対立しており、小辞 *of* が実際にどこまで完了を表した

³ 吉田 (1980: 101, 106) 参照。ただし、この研究では、ゴート語以外のゲルマン語における接頭辞 *ge-* の変遷について、十分には論じられていない。とりわけ、吉田 (1980: 104-106) の古アイスランド語に関する記述では、接頭辞 *ge-* に代わる形式として、助動詞と分詞の組み合わせによる形式の発達が論じられているが、小辞 *of* に関する言及は見られない。

⁴ 接頭辞 *ge-* の研究史として、Heindl (2017: 61-107) を参照。

⁵ 吉田 (1980: 104ff.) 参照。

⁶ Gering (1971: 753f.) 参照。

⁷ la Farge/Tucker (1992: 200)

か疑問が残る。このような背景を踏まえ、本稿では、接頭辞 *ge-* の衰退とその代替形式の発達を考究する観点から、古アイスランド語における完了について考察する。

2. 先行研究

古アイスランド語を含む北ゲルマン語では、アクセントを持たない接頭辞の母音は弱化し、接頭辞は次第に失われた（例 *got. galeiks* : *aisl. glíkr* : *nhd. gleich* ; *got. ganohs* : *aisl. gnógr* : *nhd. genug*）⁸。現代の北欧語における対応語 *norw. lik, nok* ; *dän. lig, nok*⁹ との比較からも、接頭辞 *ge-* の衰退が窺われる。こうした接頭辞の衰退の結果、北欧語では、後に中世低地ドイツ語の接頭辞を借用するほどであった¹⁰。

北欧語における接頭辞の消失は、動詞を中心とした言語形式に変化をもたらした。まず、動詞の意味に基づく研究として、Vönhof(1905) が挙げられる。この研究によれば、北欧語ではしばしば動詞の意味が多岐にわたるが、こうした動詞の多義性は、元来ノルド祖語に存在した接頭辞により、動詞の意味が拡張された結果であると考えられる¹¹。その議論を発展させた Jónsson (1970) では、接頭辞と動詞の統語構造への関連性について論じられている。この研究では、ゴート語などでは動詞に接頭辞を付加することで統語構造の弁別が示されるが、北欧語では

⁸ Heusler (1967⁷: 40f.), Noreen (1970⁵: 135) 参照。例示は Heusler (1967⁷: 40) に基づく。なお、吉田 (1980: 104) にも同様の例示がみられる。Krause (1971: 136) によれば、このような接頭辞の初頭子音の名残はルーン碑文には見られない。北欧語における接頭辞 *ge-* の残存形式は、Wadstein (1895) が詳しい。以下、研究史の把握には、櫻井 (1995: 24ff.) を参考にした。

⁹ その他のゲルマン語の対応語は de Vries (1977³: 174, 180), Falk/Torp (1910: 642, 769) を参照。

¹⁰ Haugen (1976: 221) 参照。ドイツ語からの接頭辞の借用については、Jónsson (1970: 384f.) にも言及がみられる。なお、現代語における接頭辞の研究として入江 (2013) を参照。

¹¹ Vönhof (1905: 9, 13) 参照。例えば Vönhof (1905: 17) によれば、古アイスランド語の „standa“ (*nhd. stehen*) の意味 „herkommen“ は元来、接頭辞 „and-“ との組み合わせに由来する。接頭辞 *ge-* については、Vönhof (1905: 39-48) に用例が示されている。

接頭辞が失われた代わりに前置詞句が発達したと論じられている¹²。

動詞そのものが持つ意味や、動詞をとりまく統語構造の変化に加え、接頭辞の消失はアスペクトの表現形式にも変化を引き起こしたと考えられている。序で述べたように、ゲルマン語では Streitberg (1891) 以来、動詞に接頭辞を付加することで完了が表されたと考えられている。しかし、前述の音韻変化の結果として接頭辞が失われた北欧語では、接頭辞に代わるアスペクトの表現形式が必要となった。以下、小辞 of に関する従来の記述を概観する。

古アイスランド語の代表的な文法・語彙記述では、of の機能について意見が分かれている。Heusler (1967⁷: 41) は of の用法を①韻律上の虚辞、②前置詞¹³、③接頭辞¹⁴、④可能に分類している¹⁵。『詩のエッダ』の語彙集である Gering (1971: 753f., 1923⁵: 137), Neckel (1936²:133) は、接頭辞 ge- と同様に完了相を表す機能を持っていた of が、機能の弱化によって韻律上の虚辞になったと説明し、Krause (1971: 41) もルーン碑文の ob (of) が完了相を表したと記述している。一方で、Jónsson (1966: 436) は of が本来、「強調」¹⁶ の意味を持っていたと述べ、la Farge/Tucker (1992:200), Neckel/Kuhn (1968³: 156) は of が意味を持たない韻律上の虚辞だと記述している。他方、Gebhardt (1896: 50ff.) は、of が未完了的な動詞を完了的にする機能を持ち、さらに自動詞を他動詞に変える機能も持っている指摘している。このように、古アイスランド語の辞書や文法記述では、of の機能をめぐって様々な見解が示されている。しかし、以上のような記述はいずれも断

¹² Jónsson (1970: 386f.) 参照。例えば、Jónsson (1970: 387) によれば、ゴート語の ga-fraihnan/fraihnan は生物目的語を支配する場合、それぞれ “ask someone” と “ask, make inquiries, about someone” を意味する。アイスランド語では接頭辞の代わりに前置詞 at を用いて表現する。

¹³ 前置詞としては、現代ドイツ語の „über“ に相当する。Geirng (1971: 749) 参照。

¹⁴ 接頭辞としては、„zu sehr, zu viel“ を意味する。Gering (1971: 760f.) 参照。

¹⁵ なお、櫻井 (1995: 24) も参照。

¹⁶ Jónsson (1966: 436) は of について „udfyldende partikel (kan ikke oversættes); oprindelig har den vel haft en forstærkende betydning, og da vistnok særlig stået foran akjektiver [sic], participier og adverbier; senere – og kun således optræder den i historisk tid – afblegedes ordet og dets betydning” 「〔韻律を〕満たす虚辞であり（この語は訳されえない）元来は強調の意味を持っていたようで、それからまたおそらく、〔この小辞は〕形容詞、分詞、副詞の前に置かれた。後に—そしてまた歴史時代においてのみ、このように出現するのだが—この語とその意味は弱められた。」と述べている。引用文の和訳、下線は筆者による。〔〕内は筆者による訳注である。なお、„akjektiver“ は „a[d]jektiver“ の誤記と判断した。

片的である。

小辞 *of* の機能に関する研究史の中で、とりわけ代表的な研究として位置付けられるのは、Kuhn (1929), Dal (1930a, 1930b) である。Kuhn (1929) の主要な論点は次の通りである。*of* は元来、ゲルマン祖語に由来する接頭辞であり、北欧語において他の接頭辞を駆逐した後に、接頭辞としての造語論上の結合を失い小辞となった。*of* は意味を持たず、失われた接頭辞の代わりに韻律上の虚辞として用いられるようになったほか、可能を表す用法を持つ¹⁷。

一方、ほとんど時を同じくして発表された Dal (1930a) は、小辞 *of* の機能を積極的に認めている。この研究の主な論点は次のようにまとめられる。ゲルマン語では接頭辞の付加によって動詞の完了相を表したが、小辞 *of* の機能はこの接頭辞の機能に遡る。接頭辞動詞は Simplex (接頭辞を持たない動詞) と対比される完了的な意味を持っていたが、接頭辞を失った北欧語では、Simplex が完了的・未完了的な意味を兼ね備えることとなった。小辞 *of* は動詞に完了的な意味を与えるのではなく、すでに未完了的・完了的な意味を兼ね備えている Simplex とともに用いられる場合に、Simplex が完了的な意味を表すことを強調する。それゆえに小辞 *of* は動作の遂行や実現、目標への到達などの概念と結びつく¹⁸。

以上で述べた Kuhn (1929), Dal (1930a, 1930b) では、韻文・散文の資料からおびただしい数の小辞 *of* の用例を収集し、その用法や出現する環境によって分類している。そのうえで、個別の *of* の用法が記述されており、徹底した用例収集と詳細な記述は一定の価値を持つ。しかし、個別の用例の記述においては、疑問の生じる解釈も見受けられる¹⁹。これらの学説の中で、とりわけ本稿において重

¹⁷ 以上の記述は、Kuhn (1929: 62f., 100f., 126f.) に基づいて筆者がまとめた。

¹⁸ 以上の記述は、Dal (1930a: 9f., 51) に基づいて筆者がまとめた。Kuhn (1929) 説への批判は Dal (1930a: 85ff.) を参照。

¹⁹ たとえば Dal (1930a: 11) では、„ok ek drykk of gat ens dýra mjaðar ausenn Óþrere“ (Hqv 140, 3f.) 「そして私〔オーディン〕はオーズレリルから汲み出されたその素晴らしい蜜酒の一飲みを手に入れた。」を „ich erreichte es *wirklich*, den Trunk zu genießen.“ と訳し、当該例における *of* が動作の意味を強調すると述べている。ドイツ語訳の „*wirklich*“ に該当する語は古アイスランド語の原文には存在せず、研究者の主観による意識である。同様の意味内容は、例えば „gambantein ek gat“ (Skm 32, 4) 「魔法の杖を私〔スキルニル〕は手に入れた。」のように、小辞 *of* を伴わずとも表現可能である。和訳は谷口 (1974: 39, 66) も参考にし、原文の引用は Sijmons (1906) によった。なお、以上の引

要であるのは Dal (1930a) の説である。この研究では、元来、ゲルマン語において完了を表した *ge-* などの接頭辞が北歐語において失われた結果、小辞 *of* がその一種の代替形式の役割を担ったと考えられている²⁰。確かに、小辞 *of* が接頭辞 *ge-* に類似する機能を持つとの考え方は、櫻井 (1995) にもみられる²¹。しかし、以上で示した Dal (1930a: 86) と Kuhn (1929: 103f.) では、*of* の完了相を表す機能については意見が分かれており、小辞 *of* が古アイスランド語において実際にどこまで完了を表す形式として機能したか疑問が残る。

他方、古アイスランド語では助動詞と過去分詞の組み合わせによる完了形式が発達していた。先に述べた吉田 (1980) では、接頭辞の失われた北歐語においては、現在完了形が接頭辞に代わる完了表現の役割を担ったと考えられている。小辞 *of* が完了を表すならば、この小辞の機能は分析的な完了形式の機能と重複すると予測される。この場合、北歐語における接頭辞の代替形式が併存したことになるが、その詳細な関係については、従来の研究では考察されていない。このため本稿では、まず小辞 *of* の用例を収集・記述し、そのうえで個別の実例の分析に基づいて論を進める。

以下、本稿では、*of* の完了相を表す機能を実例に基づいて検証し、そのうえで現在完了形の機能と比較する。分析対象となるのは、『詩のエッダ』²²の全文である。ただし、現在完了形との比較の観点から、本稿では分析対象を動詞の直説法過去形と共起する *of* の用例に限定する²³。なお、『詩のエッダ』は必ずしも厳

用における下線とイタリックは筆者による。

²⁰ Dal (1930a: 63ff.) 参照。

²¹ 櫻井 (1995:28f., 31ff.) 参照。なお、櫻井 (1996) も参照。

²² 谷口 (1974: 283) によれば、成立年代はおおよそ 800 年から 1100 年である。以下、本稿では、韻文の文献を『詩のエッダ』と表記し、スノリ・ストルルソン (1197-1241) による『散文のエッダ』(1220 年ごろ成立) と区別する。谷口 (1979: 19f.) 参照。櫻井 (1995: 27) は『散文のエッダ』の『ギュルフィのたぶらかし』を分析した結果、作品の「地の文」には *of* の用例が見いだされないと指摘している。この点も、本稿が『詩のエッダ』を分析対象とした理由である。

²³ 櫻井 (1995: 32) は、*of* の完了的な機能が動詞の過去時制と関連すると指摘している。また、Dal (1930a: 9) も、完了的な *of* がとりわけ動詞の直説法過去形と共起する、と述べている。この点も参考にした。なお、Cleasby (1962²: 462), Gering (1971: 760), Sijmons (1906: cLXXXIVf.) が記述しているように、*of* は写本の段階では *um* と交替することがある。櫻井 (1995: 24, 35) も参照。しかし、

密な韻律規則によらず、韻律に基づく考察が有効であるとは言い切れないため、of の韻律上の機能は考察から除外する²⁴。

3. 分析の方法論

実例の検討に先立って、本節では分析の方法を述べる。本稿の分析対象となるのは、『詩のエッダ』に現れる of の全用例中、動詞の直説法過去形と共起する用例である²⁵。小辞 of の機能は、アスペクトの区別に関連すると考えられているため、分析に際してアスペクトの定義を確認しておきたい。Comrie (1976) と Schrodtt (2004) を参考にアスペクトの定義をまとめると次のようである²⁶。

これらの語には本来、語源的な関係は認められない。Feist (1933³: 88, 509) によれば、um (*got.* bi) は *idg.* **m̥bhi* (vgl. *gr.* ἀμφί; *ahd.* umbi) に遡るが、of (*got.* uf) は *idg.* **upó* (vgl. *gr.* ὑπό; *ahd.* oba) に遡る。本稿では、of と um の交替には立ち入らず、常に Sijmons (1906) の表記に従う。この観点から、Sijmons (1906: 50) „þar hann upp umb reis“ (Hóv 145, 6) の 1 例は考察から除外した。下線は筆者。Gering (1971: 756) は当該例を of に改め、of の用例として記述しているが、本稿の考察対象である Sijmons (1906) の表記と異なる。

²⁴ 谷口 (1974: 289f.) によれば、『詩のエッダ』では複数の音節を一つの音節と数えるなど音節数の規則がかなり曖昧である。こうした例外的な措置は Sievers (1893: 27, 64ff.) に示されている。その他にも、『詩のエッダ』には自由韻律詩と呼ぶべき詩も含まれており、詩形の面で不統一である。Sievers (1893: 90f.) 参照。Kuhn (1929: 63) にも、韻律上の「余分な „überschüssig[en]“ of が見いだされると指摘されている。

²⁵ 用例収集に際しては、コンコーダンスとして Gering (1971) を使用した。なお、Kellogg (1988: 344) も参考にした。

²⁶ 以下の記述は、Comrie (1976: 16ff., 52ff.) と Schrodtt (2004: 104ff.) の記述に基づいて筆者がまとめたものである。これらの文献のほかに、齋藤／田口／西村 (編) (2015: 4ff.) も参考にした。なお、アスペクトの日本語表記について、齋藤／田口／西村 (編) (2015: 4ff.) では“perfective”を「完結相」、現在完了にあたる“perfect”を「完了相」としている。ただし、“perfective”は基本的に“imperfective”「未完了相」と対をなす概念であり、“perfect”とはおのずから異なる。Comrie (1976: 52) に記述されているように、現在完了は動作そのものではなく、先行する動作に関連する結果状態を表す形式だからである。このため、本稿では“perfective”について「完了相」の用語を用いる。印欧語における“imperfective”/“perfective”の二項対立と、“perfect”の性質が根本的に異なることについては、Meier-Brügger (2000⁷: 238) を参照。このほか、Comrie (1976)

- ①未完了相：動作の開始や終結を考慮せず、動作の内部構造や状況に目を向ける観点。下位区分として、動作が習慣的・継続的に行われる様子を表す。
- ②完了相：動作を構成する個々の状況を区切ることなく、動作全体を外部からひとつの総体としてとらえる観点。下位区分として、動作の開始、もしくは動作の完結や結果を表す。

動詞の分類に際しては、of の機能を明確にするため、完了的な意味を持つ動詞を考察から除外する²⁷。Streitberg (1891: 103ff.) には、完了的な意味を持つゴート語の動詞が挙げられている。本稿では、これらのゴート語の動詞に対応する古アイスランド語の動詞 (bjarga, blanda, finna, gefa, láta, nema, koma, kveða, verða)²⁸を考察から除外する²⁹。

実例の分析では、同一の動詞の用例について、of と共起する用例と、of と共起しない用例を比較する。その際、of との共起関係が明確でない用例は分析から除く³⁰。さらに、小辞 of との共起の有無以外の比較条件を同一にするため、of の共起しない用例との比較においては、同一の意味用法の動詞用例のみを考察対象

に基づく分類として吉田 (1980: 91f.) を参照。

²⁷ 櫻井 (1995:29, 35) は、of の使用範囲が動詞の意味と関連しており、of が「少なくとも telic な動詞とは共起しないように思える」と指摘している。一方で、Dal (1930a: 9) は of が完了的な動詞とも共起すると記述している。Krause (1968³: 212f.) によれば、接頭辞 ge- による完了相・未完了相の区別は、未完了的な意味特性を持つ動詞の場合に明確になる。このため、本稿では、一つの試みとして完了的な性質を持つ動詞を除外する。

²⁸ Streitberg (1891:103ff.) の挙げる動詞一覧：got. bairgan, blandan, briggan, finþan, fraþjan, gaumjan, giban, letan, niman, qiman, qiþan, wairþan. 語源的な対応関係は、Feist (1939³), Lehmann (1986), de Vries (1977³) を参照した。got. brigga の対応語は古アイスランド語に在証されない。fraþjan (st. V) と語源的に関連する aisl. fróða (sw. V) は、語形成の面から形容詞 fróðr と弱変化動詞第 I 類の語尾 *-jan の合成と考えられ、厳密には対応しないため除外する。Krahe (1957³: 115) 参照。gaumjan の対応語 geyma は『詩のエツダ』に在証されない。

²⁹ 以上の方法論は、野添 (2020: 206f., 2021: 35, 2022: 181) と重複する。

³⁰ 本稿では、Kuhn (1929: 8) を参考に、小辞 of が動詞の直前に置かれる場合のみ共起する例と判断する。

とする³¹。以上の方法論に基づいて、次節では、古アイスランド語の of の実例を分析する。

4. 小辞 of の完了相を表す機能の検証

前節で述べた方法論に即して、本節では of の実例を分析する。実例の分析に入る前に、調査で得られた of の用例の典拠を記述する。

表 1：直説法過去形の動詞と共起する小辞 of の一覧

動詞	of の実例の典拠	of の共起数
beiða	Gþr I 22, 3	1
benda	Rþ 27, 4	1
bera	Vsp 34, 2; Hdl 38, 1; Hdl 38, 1	3
bita	HHv 38, 3	1
biða	Gþr I 7, 3	1
fá	Hym 39, 3	1
ganga	Vkv17, 2; Vkv 32, 2; Od 3, 3	3
geta	Hóv 140, 3; Vm 32, 3; Fj 8, 1	3
grafa	Hrbl 45	1
grata	Vsp 34, 3	1
greiða	HH I 3, 3	1
gør(v)a	Vsp 10, 3; Am 1, 1	2
hljóta	Þrk 32, 3	1
hvetja	Grt 24, 3	1
hyggja	Sd 13, 2	1
kenna	Am 59, 2	1
leggja	Bdr 2, 2; Od 2, 4; Vkv 24, 4; Vkv 36, 4; Sg 42, 2	5
leika	HHv 38, 3; Gþr I 6, 6; Hm 14, 2	3
lita	Gþr I 25, 4	1
ráða	Sd 13, 1	1

³¹ たたとえば動詞 *bera* は現代ドイツ語の „tragen“, „bringen“, „gebären“ などに相当し、意味用法が多岐にわたる。Gering (1971: 96ff.) 参照。本稿での動詞の意味用法の分類は Gering (1971) に従う。

reyna	Vm 3, 2; Vm 44, 2; Vm 46, 2; Vm 48, 2; Vm 50, 2; Vm 52, 2; Vm 54, 2; Am 87, 3	8
rista	Hóv 145, 5; Sd 13, 1	2
sakna	Þrk 1, 2	1
skepja	HH I 2, 2	1
skilja	Vkv 4, 3	1
skjota	Vsp 24, 1	1
sofna	Vkv 29, 2	1
stiga	Ghv 13, 4	1
taka	Gþr III 8, 2	1
þekkjja	Od 16, 4; Þrk 31, 2	2
þjota	Hm 18, 3	1
treþja	Ghv 2, 4; Hm 3, 2	2
valda	Hym 38, 4	1
vinna	Gþr I, 20, 2	1
yppa	Vsp 4, 1	1
<hr/>		
35 語		43 例

接頭辞 *ge-* に関する研究では、とくにゴート語や古高ドイツ語の文献の多くが古典語の原典に基づく翻訳文献であるため、考察に際してしばしば翻訳原典の動詞活用形との対応関係が根拠とされてきた³²。古アイスランド語の文献である『詩のエッダ』は、このような翻訳原典の存在しない文献である。したがって、上述のような他の言語との対応関係に基づく考察方法を用いることはできない。

本稿では、*of* と共起する動詞過去形の用例を、*of* の現れない同一の動詞の用例と比較することで、*of* の機能を検証する。ただし、文例の比較に基づいて分析を進める以上、個別の用例の解釈には主観的な判断が入り込む可能性がある。さらに、実例の中には、アスペクトの判断が困難な用例も含まれる。しかし、恣意的な判断に基づいて議論を進めることは避けるべきである。このため、本稿では典型的な用例のみを例示する。

以下、本稿の調査で得られた小辞 *of* の用例の中から、小辞 *of* がアスペクト

³² たとえば、吉田 (1980) はゴート語の分析に際し、ギリシア語の動詞活用形との対応関係を判断基準としている。

〔ヴァーリは〕手を洗わず、頭〔髪〕に櫛をかけなかった³⁷。

例 (1) は、シグルズ（ジークフリート）が竜（ファーフニル）を殺して財宝を奪う場面の例である。当該の例は、竜が財宝を守っていた間、兜を自分の頭にかぶっていたことを意味する。この用例では、兜を頭に乗せる、または脱ぐ、といった動作の開始や終結は表されず、兜を頭に乗せていた、という動作の内部に視点が置かれている。したがって、当該例は未完了相を表す用例であると言える。

一方、例 (2) は、戦勝祈願のために身支度を整えなかった³⁸ ヴァーリが、仇敵の屍を火葬用の薪の上に乗せたことで初めて身支度を整えたことを示す。当該例は、「運ぶ」という動作の開始や進行を表さず、運んで薪を乗せるという一連の動作の過程を、過去における単一の動作として描写する。したがって、例 (2) は完了相を表す。

上に示した例 (1), (2) の比較から、例 (2) では of の共起が完了相・未完了相の区別に関与していると考えられる。しかし、上記の例のように、of の共起の有無によって完了相・未完了相の区別が明確になる用例ばかりではない。

- (3) *Hann Gjalp of bar.*
 he-NOM. Gjalp-AKK. PART. bear-PST.
hann Greip of bar,
 he-NOM. Greip-AKK. PART. bear-PST.
bar hann Eistla ok Eyrgjafa,
 bear-PST. he-NOM. Eistla-AKK. and-CONJ. Eyrgjafa-AKK.
hann bar Ulfrúm ok Angeyja,
 he-NOM. bear-PST. Ulfrún-AKK. and-CONJ. Angeyja-AKK.
Imþr ok Atla ok Ísarnsaxa (Hdl 38, 1)
 Imþr-AKK. and-CONJ. Atle-AKK. and-CONJ. Ísarnsaxa-AKK.

彼〔巨人ゲイルロズ³⁹〕は〔9人の娘〕ギャルプを生み、彼はグレイブを生んだ。彼はエストラとエイルギャヴァを生み、彼はウールヴルーンとアングイ

³⁷ 和訳は谷口 (1974: 12) を参考にした。

³⁸ Gering/Sijmons (1927: 47) によると、こうした戦勝祈願の作法はタキトゥスの『ゲルマーニア』第31章にも示されている。タキトゥス (2010: 149) 参照。

³⁹ Gering (1971: 1281) 参照。

ヤ、イムズとアトラ、そしてイサルンサクサを生んだ⁴⁰。

例 (3) では、巨人が 9 人の娘を生んだことが示される。この例では、同一用法の *bera*「生む」が 4 回用いられるが、*of* と共起するのは初めの 2 例のみである。この場合、4 例はいずれも過去における単一の動作を表し、*of* の共起の有無はアスペクトの区別に関与しない。

- (4) *upp óxo þar Jarle borner:*
 up-ADV. grow-PST. there Jarlr-GEN. born-P.P.NOM
hesta tǫmpo, hlífar bendo,
 horse-AKK. tame-PAST. shield-AKK. bend-PST.
skeyte skófo, skelfþo aska (Rp 43, 3)
 arrow-AKK. make-PST. spear-AKK. swing-PST.

ヤルルから生まれた者〔子供〕たちはそこで成長し、馬を手なづけ、盾を丸くし〔金属の縁をつけ〕⁴¹、矢〔投げ槍〕を作り、とねりこの槍を振った⁴²。

- (5) *gekk inn at þat: golf vas stræþ. [...]*
 go-PST. in-ADV. after-PREP. that-AKK. floor was-PST. strew-P.P.
sat húsgume ok snøre streng,
 sit-PST. house owner-NOM. and-CONJ. twist-PST. string-AKK.
alm of bende, þrvar skepte (Rp 27, 4)
 bow-AKK. PART. bend-PST. arrow-AKK. make-PST.

その後、〔リーグが家の〕中に入ると、床は〔藁が〕⁴³敷かれていた。〔中略〕亭主は座って弦をよじり、楡の木でできた弓を曲げ〔て弦を張り〕⁴⁴、矢を作

⁴⁰ 和訳は谷口 (1974: 210) を参考にした。

⁴¹ „benda“ の解釈について辞書の見解が分かれている。Gering (1971: 95) は „biegen, runden“ を意味すると記述しているが、Neckel (1936²: 12) は „mit band versehen“ を基本的な意味としている。Neckel (1936²: 12) の解釈に従えば、当該例は „schilde mit metallener einfassung versehen“ を意味する。

⁴² 和訳は谷口 (1974: 204) を参考にした。

⁴³ 谷口 (1974: 203), Gering/Sijmons (1927: 357) 参照。

⁴⁴ 注 41 参照。Neckel (1936²: 12) は当該例を „den bogen mit sehne versehen“ と解釈している。

った⁴⁵。

例 (4) はヤルルの子供たちが成長した過程を示す。当該例は、馬を手なづけ、武具の操作を覚えたことをすでに完結した過去の事柄として示しているとも解釈されうる。同時に、子供たちの成長が今まさに進行中であり、盾を丸めるという行為の内部に着目した表現であるとも解釈可能なため、アスペクトの観点からは解釈が曖昧となる。

他方、例 (5) は、リーグが旅の途中で、とある家に立ち寄る場面の例である。当該例は、家の中に入ったときに、家主が弓の修繕を行っていたことを示す。弓の修繕の手順を説明した第2文では、benda「曲げる」が of と共起する。当該例は、弓に弦を張るために、弓を手でたわませていたことを、未完了的に表現しているとも解釈されうる。一方、弓の修繕にまつわる一連の動作を、過去の単一の動作の連続として表現しているとも解釈可能であり、アスペクトの観点からは判断が困難である。

以上で示した例 (3) と (4), (5) では、それぞれ同一の動詞の用例に基づき、小辞 of の共起の有無とアスペクトの関連性について検討した。例 (3) では、小辞 of の共起の有無にかかわらず、いずれの動詞の用例も完了相を表す。他方、例 (4), (5) の比較では、小辞 of と共起する用例、of と共起しない用例のいずれも、アスペクトを判断しがたい。このことから、上記の用例において、小辞 of がアスペクトを区別する決定的な要素であるとは考えられない。確かに、先に示した例 (1), (2) のように、of が完了相・未完了相の区別に関与していると考えられる用例も存在する。しかし、例 (1), (2) のように小辞 of の役割が明確となるのは、小辞 of を伴わない動詞の用例が未完了相を表し、小辞 of を伴う動詞の用例が完了相を表す場合のみであり、実際、このような比較条件が揃う用例は少ない。

先行研究では、古アイスランド語よりも古層の言語である「後期北ゲルマン基語」では of がより生産的に用いられ、古アイスランド語における of はすでに機能的に衰退していると推定されている⁴⁶。しかし、『詩のエッダ』より古い言語の状況を伝える文献史料は限られており、より古期の言語における小辞 of の使用を再建することは事実上、困難である。少なくとも、本稿の調査結果からは、of が『詩のエッダ』の言語において、完了相・未完了相を明確に区別する弁別機

⁴⁵ 和訳は谷口 (1974: 203) を参考にした。

⁴⁶ 櫻井 (1995: 29) 参照。櫻井 (1995: 29) における「後期北ゲルマン基語」は、6世紀末から8世紀前半までを指す。櫻井 (1995: 25) 参照。

能を持っていたとは考えられない。

5. 小辞 of の用例と現在完了形の比較

前節で論じたように、『詩のエッダ』において of は完了相・未完了相を区別する弁別的な機能を持っていたとは言えない。吉田 (1980: 104ff.) が示しているように、接頭辞 *ge-* の付加による完了表現を失った古アイスランド語では、分析的な現在完了形が完了表現の役割を担ったと考えられる。本節では、『詩のエッダ』における分析的な現在完了形の用例を記述し、その用法を検討することで、古アイスランド語における完了表現の様相を明らかにする。

現在完了形は、*hafa* (*nhd.* *haben*) と *vera* (*nhd.* *sein*) を助動詞とし、動詞過去分詞との組み合わせで構成される⁴⁷。*vera* を助動詞とする現在完了形は、一部の自動詞などの場合に限定され、助動詞の選択に際して動詞の性質や意味などの制約を受ける⁴⁸。実際、Gering (1971: 1127-1130) によって調査すると、本稿の調査対象となった of と共起する動詞のうち、*vera* との組み合わせによる現在完了形が在証される動詞は 2 語 3 例 (*ganga*: Grp 8, 4; Od 32, 4. *stíga*: Skm 15, 1) のみである。さらに、上述の動詞のうち、*ganga* (*nhd.* „gehen“) には *hafa* を用いた完了形の用例も在証されることから、完了形を構成する助動詞における *vera* の選択は限定的であったことが窺われる⁴⁹。

⁴⁷ このほかに、Heusler (1967⁷: 136) は *hafa* と類似する意味を持つ動詞 *eiga*, *fá*, *geta*, *vinna* が過去分詞と組み合わせられる、と記述している。ただし、Heusler (1967⁷: 136) の記述に従えば、*fá*, *geta*, *vinna* を用いた形式は „fertig bringen, können“ の意味を帯びるため、純粋な完了形式とは言えない。また、*eiga* と過去分詞の組み合わせは、Gering (1971: 181) に従えば 2 例のみであり、いずれも過去完了形に相当する例である。このため、*hafa* 以外を用いる形式は考察から除外する。

⁴⁸ Heusler (1967⁷: 129) によれば、*vera* によって現在完了形を形成する動詞は、「移動と開始を表す自動詞 „intransitive[n] Bewegungsverba und Ingressiva“」である。

⁴⁹ この点、現代ドイツ語における *schwimmen* や *laufen* などの自動詞の完了形において、完了の助動詞として *haben/sein* の両方が用いられることと類似する。森田 (1981: 168), Barnes (2008: 249) によれば、アイスランド語の自動詞の現在完了形では、助動詞 *hafa/vera* を用いた場合に意味表出の差異があり、*hafa* を用いると動作の完結に力点が置かれ、*vera* を用いると動作よりもその結果状態に力点が置かれる。ただし、Heusler (1967⁷: 129) が記述しているように、古アイスランド語では *vaxa* „wachsen“ や *verða* „werden“ でも完了の助動詞として *hafa/vera* の両方を用いることが可能である。こうした助動詞の選択

他方、古アイスランド語において、hafa を用いる現在完了形は一定の発達を遂げている。周知のように、元来、ゲルマン語の „haben“ を用いる現在完了形は、「過去分詞の状態になった目的語」を「所有する」を意味する形式であり、過去分詞は対格目的語の補語であったため目的語の性数格に応じて語尾変化した⁵⁰。ドイツ語史では、対格目的語が „haben“ ではなく過去分詞の目的語と再解釈され、現在完了形が発達すると、次第に過去分詞は語尾変化を示さなくなった⁵¹。換言すれば、過去分詞の語尾と目的語の間における性数格の呼応の消失は、現在完了形を構成する „haben“ および過去分詞と対格目的語の支配関係の再解釈が生じたことの表れであり、現在完了形の発達段階を示す一つの指標と言える。

古アイスランド語の hafa を用いた現在完了形の特徴の一つに、hafa とともに用いられる過去分詞の語尾が、目的語の性数格にかかわらず中性単数対格形 (-t) に固定化されたことが挙げられる⁵²。Heusler (1967⁷: 136) は、韻文文献と散文文献を比較した場合、現在完了形における過去分詞の語尾の出現傾向に差異があり、韻文文献では過去分詞が目的語の性数格に応じた語尾変化を示す用例が優勢である、と指摘している。しかし、『詩のエッタ』における現在完了形の用例には、すでに目的語の性数格に対応しない語尾を持つ過去分詞の用例が現れており、現在完了形の文法化が進んでいたことが窺われる⁵³。このため、本稿では、vera を用いる形式より一般的な完了形式と考えられる、hafa による直説法の現在完了形のみを考察対象とする。

古アイスランド語における現在完了形は、常に結果状態を表すとは限らない。Heusler (1967⁷: 129) の記述に従えば、古アイスランド語の現在完了形には、①すでに完了した動作を現在の時点から叙述する用法、②ある終結した動作の現在における影響を表す用法、の2つの用法がある⁵⁴。これらの用法を、Comrie (1976: 56ff.) による現在完了の分類と照合すると、②は「結果を表す現在完了」(“the perfect of result”) に該当し、①は「経験的な現在完了」(“the experiential perfect”)

基準に関する考察は今後の課題としたい。

⁵⁰ 以下の記述は、荻野／齋藤 (2015: 91f.), Dal / Eroms (2014⁴: 138f.) を参照した。なお、以下の記述は野添 (2020: 209; 2022: 188) と一部、重複する。

⁵¹ Dal / Eroms (2014⁴: 139) 参照。

⁵² 森田 (1981: 168), Heusler (1967⁷: 136) 参照。

⁵³ 例えば、„nú hefr [...] greipt glóp stóran“ (Am 81, 6) 「今や、あなたは〔中略〕大いなる悪事を働いた。」では、„greipa“ の過去分詞は中性単数対格形であり、男性単数対格形の目的語 „glóp stóran“ 「大いなる悪事を」に対応しない。森田 (1981: 168) が記述しているように、次例のように与格の目的語 („þér“ 「あなたを」) と結合する場合にも過去分詞は中性単数対格形となる。„björt hefr þér eige boþet í sinn þetta“ (Am 11, 4) 「白い肌の女性は、今回あなたを招待したのではない。」以上の用例における下線、省略、和訳は筆者による。なお、和訳は谷口 (1974: 181, 189) を参考にした。

⁵⁴ 以上2点の記述は、Heusler (1967⁷: 129) の記述を筆者がまとめたものである。

に該当する⁵⁵。結果を表す現在完了は、過去の動作の結果として生じた状態を表す用法であり、過去の動作それ自体よりも現在における結果状態の描写に力点が置かれる。一方、経験的な現在完了とは、過去のある時点で完結した動作そのものを一種の回想として描写する用法であり、動作の結果状態を含意しない⁵⁶。この点で、小辞 of の用例と比較すべき用法は、過去における完結した動作を描写する①の用法である。以下に本稿の調査で得られた hafa と過去分詞の組み合わせによる現在完了形の一覧を示す⁵⁷。

表 2 : hafa を用いる直説法現在完了形の一覧

動詞	hafa を用いる現在完了形の典拠	用例数
ala	Fm 41, 3	1
árna	Am 82, 2	1
auka	Am 81, 5; Bdr 5, 2	2
benja	Fm 25, 3	1
bera	Ls 23, 5; Ls 33, 4; Alv 5, 4; Akv 46, 3	4
biþa	Fj 48, 1; Gþr I 4, 3	2
bjóþa	Am 11, 4	1
bregþa	Hlr 4, 4	1
brjóta	HH II 15, 4	1
búa	HHv 15, 3	1
dvelja	Hrbl 128; HHv 30, 1	2
eiga	FM 2, 3	1
eta	HH I 38, 1	1

⁵⁵ カッコ内の用語は、Comrie (1976: 56, 58) より。Comrie (1976: 59) はこれら 2 つの用法の差異を、現代英語の “*Bill has gone to America*” と “*Bill has been to America*” の比較を用いて説明している。Comrie (1976: 59) によると、前者は、アメリカに発った結果として現在アメリカにいることを含意する。一方、後者は過去のある時点にアメリカに渡航したことをのみを表し、現在の状況は考慮されない。

⁵⁶ 以上の 2 文の記述は、Comrie (1976: 56ff., 58ff.) を踏まえて筆者がまとめた。

⁵⁷ ただし、Sijmons (1906: 152, 485) において、テキストの欄外に記された用例 2 例 (Alv 9b, 3; Hm 30, 3R) は除く。

fá	Skm 33, 3; Hóv 39, 1	2
fara	Vm 8, 3; Rm 2, 2; Fm 23, 2; Hóv 3, 4; Hóv 18, 2; Vm 46, 4	6
fela	Þrk 7, 1; Þrk 6, 4	2
fella	HH I 57, 3	1
finna	Gþr II 31, 2	1
fregna	FM 11, 3	1
frétta	Am 1, 1	1
fullstanda	Grt 24, 4	1
fullvega	Sg 33, 1	1
ganga	Fm 2, 1	1
gjalda	Gþr I 24, 6	1
glata	Hlr 4, 3	1
greipa	Am 81, 6	1
gróta	HH II 28, 2	1
gør(v)a	Fj 12, 1; HH II 46, 1; Grp 52, 2; Am 81, 6; Grm 5, 2; Grm 12, 2; Grm 16, 2; FM 5, 17; Fm 42, 3;	9
hafa	Fj 50, 1	1
hefna	HHv 43, 3	1
heita	HH I 19, 2	1
heyra	Hym 39, 1	1
höggva	Br 7, 3	1
hvetja	Ghv 6, 4; Br 3, 1	2
hyggja	Hóv 39, 3	1
kanna	HH I 24, 4	1
kjósa	HHv 32, 3	1
koma	Vm 43, 3; HHv 40, 4	2
kveþa	HH I 19, 3	1

launa	Br 18, 3	1
leita	Od 5, 1	1
lifa	Fj 3, 3	1
líða	Hm 2, 2	1
ljósta	HHv 29, 1	1
lúka	Fj 44, 3	1
mala	Grt 17, 2; Grt 24, 3	2
marka	HH I 48, 3; HH II 27, 3	2
minna	Am 76, 2	1
missa	Am 64, 3; Am 77, 1	2
nema	Sg 26, 4	1
njóta	Hóv 106, 1	1
ofdrykkja	Grm 51, 1	1
rata	Alv 6, 1	1
ráða	Fm 37, 3	1
reyna	Am 56, 2	1
selja	Br 2, 1; Br 2, 2	2
senda	HHv 37, 1	1
seþja	HH I 36, 3	1
skríða	HH I 38, 4	1
snýta	Am 80, 3	1
sókjja	HHv 32, 1	1
stefna	HHv 33, 3	1
styþja	Fj 12, 3	1
súga	HH I 38, 3	1
synja	Fm 36, 4	1
telja	Vsp 12, 4	1
þiggja	Hóv 9, 3; HH II 3, 1	2
þryngva	HH II 23, 4	1

þvá	Hlr 2, 4	1
treþja	Hm 19, 4	1
tyggva	Akv 39, 2	1
valda	Gþr II 29, 2	1
vaþa	Am 86, 4	1
vega	Fm 4, 4; Fm 23, 1; Hm 30, 1	3
vekja	HH II 7, 1	1
vera	Ls 26, 2; HH II 21, 1; Grp 31, 3; Gþr I 23, 3	4
verþa	HH I 38, 2	1
vesa	Ls 30, 4; Fj 36, 1; Sd 30, 1	3
veþja	Hdl 9, 1	1
vinna	Br 1, 3	1
wáenta	Fj 49, 3	1
yppa	Grm 45, 1	1
<hr/>		
82 語		117 例

本稿では、小辞 *of* の用例と現在完了形の比較に際して、同一の動詞の用例のみを比較対象とする。この観点から、以上に示した現在完了形の一覧において考察対象となるのは 12 語の動詞 (*bera*, *biþa*, *fá*, *ganga*, *gør(v)a*, *hvetja*, *hyggja*, *ráþa*, *reyna*, *valda*, *vinna*, *yppa*) である。以下、現在完了形の用例と *of* の実例を比較する。次の例を参照されたい。

(6) *Malet hofom, Frópe,*
 mill-P.P. have-AUX. Frópe-VOC.
sem munr of hvatte,
 as-CONJ. passion PART. prompt-PST.
hafa fullstaþet fljóþ at meldre (Grt 24, 3)
 have-AUX. long-stand-PST. women-NOM. by-PREP. milling-DAT.
 フロージよ、情熱が駆り立てるのに任せて、我々は粉を挽いた。

女たちはずいぶん長い間、白挽きに立った〔従事した〕⁵⁸。

(7) *Dik* *hefr* *Brynhildir* *þol* *at* *gørva*
 you-AKK. have-AUX. Brynhildir-NOM. disaster-AKK. to-PREP. make-INF.
heiptar *hvattan*, *harm* *at* *vinna* (Br 3, 2)
 anger-GEN. drive-P.P. sorrow-AKK. to-PREP. cause-INF.

災いをもたらすために、悲劇を引き起こすために、
 ブリュンヒルドはあなた〔グンナル〕を怒りへと駆り立てた⁵⁹。

例 (6) は、*sem* (*nhd. wie*) に導かれる従属文であり、粉挽きの動機を表す。当該の用例では、粉挽きをするようにと情熱が女たちを駆り立てたことが表され、粉挽きに着手した契機を表すと考えられる。しかし、粉挽きは一定の時間の継続を伴う作業であり、「情熱が駆り立てる」という事象は、粉挽きへの従事と並行して継続される動作とも考えられる。この場合、例 (6) では完了相・未完了相の区別は明確ではない。

次に、例 (7) を参照されたい。例 (7) は、シグルズ殺害がブリュンヒルドの計略であったことを、グンナルの弟ヘグニが告げる場面である。当該例では、シグルズを殺害させるために、ブリュンヒルドがグンナルを怒らせたことが示される。先に示した現在完了形の用法の分類に従えば、例 (7) は「怒りへと駆り立てる」という行為の結果状態としてグンナルの憤りを示すのではなく、むしろブリュンヒルドの行為そのものに焦点を当てた用例であり、過去の時点における動作の完結を表す。この場合、先に示した小辞 *of* の例 (6) のように、動作の描写における意味表出の曖昧さは排除され、動作の完結性を明示することが可能である。

以上の例 (1) から例 (7) までの議論を総合すると、小辞 *of* の用例ではアスペクトが曖昧となり、小辞 *of* はアスペクトの弁別を表すことができない。一方、助動詞 *hafa* の用例では、アスペクトの区別を明示することができる。このことから、小辞 *of* は *hafa* を用いる現在完了形ほど明確な意味機能を持っておらず、古アイスランド語において失われた、接頭辞によるアスペクト表現の代替形式であったとは考えられない。

⁵⁸ 和訳は谷口 (1974: 215) を参考にした。

⁵⁹ 和訳は谷口 (1974:149) を参考にした。

6. 結論

本稿では、『詩のエッダ』に現れる小辞 *of* の機能の検証、ならびに *hafa* を用いる現在完了形との比較を行った。確かに、例 (1), (2) のような個別の用例の比較において、*of* の共起の有無がアスペクトの区別に関与するように思われる用例も存在する。しかし、上述のようなアスペクトとの関連性は、あくまで個別の用例レベルでのみ認められるのであり、例 (3) のような反証も存在する。したがって、*of* が完了相・未完了相を明確に区別する形式として機能していたとは言えない。他方、古アイスランド語において一定の発達を遂げていた *hafa* を用いる現在完了形は、動作の完結性を明示する形式であり、小辞 *of* を用いる場合のような意味の曖昧さを回避することが可能である。このことから、小辞 *of* が古アイスランド語における完了表現の中心的な役割を担っていたとは考えられない。

従来の研究では、古アイスランド語における小辞 *of* の機能について、研究者の間で意見が一致しなかった。とりわけ、小辞 *of* が持つとされる完了を表す機能については、辞書や文法書などでも見解が対立しており、小辞 *of* が文中でどのように作用するか明らかでなかった。さらに、先行研究では、小辞 *of* の機能は古アイスランド語のみならず、他のゲルマン語も視野に収めた歴史的観点からも論及されていた。実際、第2節で述べたように、Dal (1930a: 63ff.) では、古アイスランド語における小辞 *of* が、古期のゲルマン語において *ge-* を含む接頭辞が果たした完了表現の役割を受け継いだ、と考えられていた。

本稿の調査結果からは、小辞 *of* はアスペクトの弁別を明示することができず、小辞 *of* には完了を表す「機能」と呼べるほどの明確な意味は認められない。古アイスランド語では、動作の完了性を明示する形式として *hafa* を用いた現在完了形が発達しており、小辞 *of* は *hafa* を用いる現在完了形ほど明確な完了表現であったとは考えられない。接辞付加によるアスペクト表現を失った古アイスランド語において完了を表す代替形式は、やはり分析的な現在完了形であったと考えられる。

使用テキスト

Sijmons, Barend (ed.) 1906. *Die Lieder der Edda*. Halle a. S.: Waisenhaus.

参考にした翻訳

タキトゥス. 2010. 『ゲルマーニア』(泉井久之助訳註) 東京: 岩波書店.

谷口幸男(訳) 1974. 『エッダー古代北欧歌謡集』東京: 新潮社.

参考文献

入江浩司. 2013. 「現代アイスランド語の接頭辞 sam- と相互性」『金沢大学歴史言語文化系論集 言語・文学篇』5: 17-30.

荻野蔵平・齋藤治之. 2015. 『歴史言語学とドイツ語史』東京: 同学社.

斎藤純男・田口義久・西村義樹(編) 2015. 『明解言語学辞典』東京: 三省堂.

櫻井健. 1995. 「古アイスランド語の小辞 of とゲルマン語の時制について」『日本アイスランド学会会報』15: 24-39.

櫻井健. 1996. 「ゲルマン語における動詞カテゴリーの再編について」『言語科学情報研究』1: 39-58.

谷口幸男. 1979. 『エッダとサガ―北欧古典への案内』東京: 新潮社

野添聡. 2020. 「Otfrid von Weißenburg „Evangelienbuch“ における古高ドイツ語動詞接頭辞 gi- の研究」『ドイツ文学』160: 204-219.

野添聡. 2021. 「ノートカーの翻訳文献における古高ドイツ語動詞接頭辞 ge- の研究―直説法現在形の用例を対象として―」『Sprachwissenschaft Kyoto』20: 33-51.

野添聡. 2022. 「動詞接頭辞 ge- と対格目的語―ゴート語と古高ドイツ語の比較による通時的考察」『ドイツ文学』164: 177-192.

森田貞雄. 1981. 『アイスランド語文法』東京: 大学書林

吉田和彦. 1980. 「ゴート語 preverb ga- の研究」『言語研究』78: 85-113.

Barnes, Michael. 2008. *A New Introduction to Old Norse, Part I: Grammar* (3rd edition). University College London: Viking Society for Northern Research.

Cleasby, Richard, Vigfusson, Gudbrand, Craigie, and William Alexander. 1962. *An Icelandic-English Dictionary* (2nd edition). Oxford: Clarendon Press.

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge/London/New York/Melbourne: Cambridge University Press.

Dal, Ingerid. 1930a. *Ursprung und Verwendung der altnordischen „Expletivpartikel“ of,*

- um. Oslo: Jacob Dybwad.
- Dal, Ingerid. 1930b. Zur Geschichte der schwachtonigen Präfixe im Nordischen. *Norsk Tidsskrift for Sprogvidenskap* 4: 179-210.
- Dal, Ingerid, and Eroms, Hans-Werner. 2014. *Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage* (4th edition). Berlin/Boston: de Gruyter.
- Falk, Hjalmar Sejersted, and Torp, Alf. 1910. *Norwegisch-dänisches etymologisches Wörterbuch, 1: A-O*. Heidelberg: Winter.
- la Farge, Beatrice, and Tucker, John. 1992. *Glossary to the Poetic Edda: Based on Hans Kuhn's Kurzes Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Feist, Sigmund. 1939. *Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache* (3rd edition). Leiden: Brill.
- Gebhardt, August. 1896. *Beiträge zur Bedeutungslehre der altwestnordischen Präpositionen mit Berücksichtigung der selbständigen Adverbia*. Ph.D. Dissertation, Leipzig University. Halle a. S.: Ehrhardt Karras.
- Gering, Hugo. 1903. *Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda*. Halle: Waisenhaus.
- Gering, Hugo. 1923. *Glossar zu den Liedern der Edda (Sæmundar Edda)* (5th edition). Paderborn: Schöningh.
- Gering, Hugo. 1971. *Vollständiges Wörterbuch zu den Liedern der Edda* (Reprint of edition 1903). Hildesheim/New York: Olms. [Sp. 979f. 欠落のため 1903 年版と併用]
- Gering, Hugo, and Sijmons, Barend. 1927. *Kommentar zu den Liedern der Edda, 1: Götterlieder*. Halle (Saale): Waisenhaus.
- Gering, Hugo, and Sijmons, Barend. 1931. *Kommentar zu den Liedern der Edda, 2: Heldenlieder*. Halle (Saale): Waisenhaus.
- Haugen, Einar. 1976. *The Scandinavian Languages: An introduction to their history*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Heindl, Olga. 2017. *Aspekt und Genitivobjekt: Eine kontrastiv-typologische Untersuchung zweier Phänomene der historischen germanischen Syntax*. Tübingen: Stauffenburg.
- Heusler, Andreas. 1967. *Altisländisches Elementarbuch* (7th edition). Heidelberg: Winter.
- Jónsson, Baldur. 1970. Reconstructing Verbal Compounds on the Basis of Syntax. In Benediktsson, Hreinn (ed.), *The Nordic Languages and Modern Linguistics*, 379-394. Reykjavík: Vísindafélag Íslendinga.

- Jónsson, Finnur. 1966. *Lexicon poeticum antiquæ linguæ septentrionalis. Ordbog over det Norsk-Iskandske skjaldensprog. Oprindelig forfattet af Sveinbjörn Egilsson* (2nd ed.). København: Atlas Bogtryk.
- Kellogg, Robert. 1988. *A Concordance to Eddic Poetry*. East Lansing, MI: Colleagues Press.
- Krahe, Hans. 1957. *Germanische Sprachwissenschaft, II: Formenlehre* (3rd edition). Berlin: de Gruyter.
- Krause, Wolfgang. 1968. *Handbuch des Gotischen* (3rd edition). München: Beck.
- Krause, Wolfgang. 1971. *Die Sprache der urnordischen Runeninschriften*. Heidelberg: Winter.
- Kuhn, Hans. 1929. *Das Füllwort of-um im Altwestnordischen*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Lehmann, Winfred Phillip. 1986. *A Gothic Etymological Dictionary*. Leiden: Brill.
- Meier-Brügger, Michael. 2000. *Indogermanische Sprachwissenschaft* (7th edition). Berlin/New York: de Gruyter.
- Neckel, Gustav. 1936. *Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern, II: Kommentierendes Glossar* (2nd edition). Heidelberg: Winter.
- Neckel, Gustav, and Kuhn, Hans. 1968. *Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern. Herausgegeben von Gustav Neckel, II: Kurzes Wörterbuch* (3rd. edition). Heidelberg: Winter.
- Noreen, Adolf. 1970. *Altnordische Grammatik, I* (5th edition). Tübingen: Niemeyer.
- Schrodt, Richard. 2004. *Althochdeutsche Grammatik, II: Syntax*. Tübingen: Niemeyer.
- Sievers, Eduard. 1893. *Altgermanische Metrik*. Halle: Niemeyer.
- Streitberg, Wilhelm. 1891. Perfective und imperfective Actionsart im Germanischen. *Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur* 15: 70-177.
- Vonhof, Richard. 1905. *Zur entwicklung der germanischen echten Verbalcomposita im Altwestnordischen*. Ph.D. Dissertation, Leipzig University. Bremen: Nössler.
- de Vries, Jan. 1977. *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch* (3rd edition). Leiden: Brill.
- Wadstein, Elis. 1895. Nordische Bildungen mit dem Präfix *ga-*. *Indogermanische Forschungen* 5: 1-32.

On the Function of the Old Icelandic Particle “*of*”

Satoru Nozoe

The aim of this study is to reexamine the function of the Old Icelandic particle “*of*”. In the oldest Germanic languages, the prefix “*ge-*” was used to express “perfect” or “perfective” meanings. Because of the functional loss of “*ge-*”, later languages have developed the present perfect construction using auxiliary verbs instead. On the other hand, in Old Icelandic, which no longer used the “*ge-*” prefix, the particle “*of*” is regarded as a significant marker of perfectivity. That being said, there is room for reexamination of the function of the particle “*of*” as there are conflicting opinions among researchers.

This paper analyzes the function of the particle “*of*” based on examples from the Poetic Edda. This survey shows that the particle “*of*” did not express the perfective meaning so clearly.